

創立記念日をむかえて

對馬路人

関西学院が神戸近郊の原田村に産声を上げたのは1889年（明治22年）のことでした。その年の初めには大日本帝国憲法が發布され、ようやく近代（戦前）日本の国家構造の骨格が定まったそんな時期でした。創設者のランバスが両親とともに宣教師として来日したのはその3年前の1886年、日本を去ったのは1891年ですから日本での宣教活動は5年ほどでした。その短い間に親子は関西学院、広島女学校（現在の広島女学院）などの学校の設立、瀬戸内海の沿岸部での伝道、教会建設に奔走しました。その成果には目を見張るものがあります。ランバス親子の精力的な活動ぶりや本国の伝道団体の支援に加え、日本におけるキリスト教ブームもその後押しをしたと思われます。当時の日本のプロテスタント信徒はメソジスト教会系だけで80万人を超えていたとする資料もあります。関西学院はこうした順風を受けて創立されたといえます。

しかしこうした順風の環境は長続きしませんでした。1890年代に入ると、いわゆる教育勅語発布に見られるように、政府は教育を通した天皇中心のナショナリズムの国民への浸透に力を注ぐようになります。それとともに国粹主義が台頭し、キリスト教やキリスト教教育が批判の矢面に立たされるようになります。内村鑑三の「不敬事件」や井上哲次郎による「教育と宗教の衝突」論議がそれを象徴する出来事です。それによりキリスト教徒たちやキリスト教主義の学校は、神への内面の信仰と天皇や国家への忠誠の関係をどう調整しどう位置づけるか、あるいは国や民族の違いを超えた無差別の博愛と人間関係の親疎・遠近により差別のある愛の関係をどう調整しどう位置付けるか、ある場合には内的な葛藤として、ある場合には直接の外圧として、判断を迫られるようになっていきました。こうした緊張をはらんだあり方は戦前期をとおして続くことになります。しかしこうした経験はある意味で、貴重な資産といえるかもしれません。なぜなら現代の我々にとっても、内面の自由と組織の秩序、個別的な愛着と普遍的博愛の葛藤といった問題は決して処理済みのものではないからです。関西学院が問いかけ、あるいは関西学院に問いかけられた問題はいまも生きていくといえるでしょう。

（社会学部教授・副学長）